

男子校の中・高校生は父親・母親役割をどのように捉えているか： 共学校との比較検討

伊藤葉子¹⁾ 倉持清美²⁾ 堀内かおる³⁾

¹⁾千葉大学教育学部 ²⁾東京学芸大学教育学部 ³⁾横浜国立大学教育人間科学部

Boy's Junior and Senior High School Students' Awareness of Father's and Mother's Roles: Comparison with Coeducational School Students' Awareness

ITO Yoko¹⁾ KURAMOCHI Kiyomi²⁾ HORIUCHI Kaoru³⁾

¹⁾Chiba University, Faculty of Education ²⁾Faculty of Education, Tokyo Gakugei University

³⁾Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama National University

1990年代に中・高校男子生徒を含む保育教育がスタートしたが、男子校の中・高校生に関する調査はほとんど見当たらない。そこで、本研究では、男子校の中・高校生の保育教育のカリキュラム開発のための基礎資料となる親役割の捉え方（認識）とその影響要因に関する質問紙調査を実施した。

対象は、都内と東京近郊の男子校中学生193名、同じく高校生525名の計718名である。また、比較考察のため、都内と東京近郊にある共学校男子中学生126名、同じく高校生139名の計265名にも同様の質問紙調査を実施した。

質問紙は、「父親役割認識」「母親役割認識」を測る尺度、影響要因としての「親になることの受容性」「幼児への興味・関心」「男女平等志向性」を測る尺度で構成した。

男子校では、家族と一緒に過ごす・仕事して稼ぐ・子どもを教え導く・ロールモデルになる・一家をリードする・家事や子どもの世話をする・生活を楽しむ等、多様な役割を認識していたが、社会の一員や夫としての役割を認識していないことなど、共学校と比べると現実的認識は弱い傾向にあることが示された。さらに、これらの父親役割認識は、親になることの受容性との関連性が強いことも明らかになった。共学校に比べると、この親になることの受容性や子どもへの興味・関心が有意に低いことから、親性の発達に課題があることが示唆された。男子校中・高校生の保育教育のカリキュラム開発のための検討が必要であると考えられる。

Although the child development education in home economics for all boys as well as the girls has launched in the 1990s, there is no current research which examined whether the curriculum of child development education in boys' schools would effect as well as one in coeducational school.

This study aimed to investigate boys' junior and senior high school students' awareness of father's and mother's roles and examine the relationships between their awareness of parent's roles and the readiness for parenting, comparing with those of coeducational school male students.

The participants consisted of 193 boys' junior high, 525 boys' senior, 126 coeducational junior high and 139 coeducational senior high school male students. Each specific scale was developed to measure "Awareness of father's and mother's roles," "Acceptance of becoming a parent," and "Interest in Children."

It was found that boys' junior and senior high school students recognized various dimensions of father's roles: as a family person, a breadwinner, a teacher, a role model, a leader, and a house worker. The results also showed they did not perceive father's roles as a citizen and a husband and they were found not to have fully developed comprehensive and realistic awareness of father's roles.

Further, the analyses revealed that boys' school students' readiness for parenting predicted their awareness of father's roles significantly.

On the other hand, it was shown that boys' senior high school students' readiness for parenting was at a lower level of development in acceptance of becoming a parent and interest in children than those of coeducational senior high school male students.

This present study suggested that more researches will be needed to develop appropriate curriculum of child development education for boys' junior and senior school students.

キーワード：父親役割 (Father's roles) 母親役割 (Mother's roles) 男子校 (Boy's school)

保育教育 (Child development education) 親になることの受容性 (Acceptance of becoming a parent)

連絡先著者：伊藤葉子

1 目 的

家庭科において、男女生徒が共に保育教育を学ぶことになってから（中学校・高等学校学習指導要領1989年改訂）から、約20年が経過した（文部省、1989a・1989b）。しかし、2006年には、一部の高校で必修教科が未履修であることが問題となり、特に私立男子進学校において家庭科の未履修が顕在化した。2006年度学校基本調査によると、高校5385校のうち男子高校は、159校であり、約3%に過ぎない。ただし、実数としては少ないが、家庭科は必修科目であり、共学校が目指す家庭科の保育教育の目標と同じ目標のもとに、男子校における保育の授業をつくっていく必要がある。

男女共同参画社会における子育てが社会全体の指標となっている今、親になる以前の青年男女に「親になるための教育」を推進していくことは、重要な教育的課題であると考え。男子校の中・高校男子生徒においても、同様にこの課題を向き合うために、女子生徒の意見を直接聞くような機会がない男子校の生徒たちが、どのように親役割を捉えているのか、また、どのような要因が影響を与えているのかを明らかにすることは、男子校の保育教育のカリキュラム開発を考えていく上で、重要な資料となると考える。

2 方 法

以上のことから、本研究では、男子校の中・高校生たちへの保育教育に焦点をあて、そのカリキュラム開発のための基礎資料となる親役割の捉え方（認識）とその影響要因に関する質問紙調査を実施した。

調査対象は、都内と東京近郊の男子校の中学生193名、同じく高校生525名の計718名である。また、比較考察のため、共学校にも同様の質問紙調査を実施した。対象は、都内と東京近郊にある中学2校、高校3校の計265名である。調査対象の内訳を表1に示す。

対象となった男子中学は、大学進学実績の高い高校への進学率が高く、また男子高校は、国立大学への進学率が高い。そのため、比較考察のために選定した共学校についても、進学実績が近い学校を選んだ。

調査実施時期は、2009年12月～2010年2月である。

本研究の目的に沿って、男子校中・高校生が「親役割をどのように捉えているのか」を調査するために、伊藤ら（2009）が、高校・大学生の親役割認識を測るために開発した尺度（35項目）をもとに、中学生の発達段階を考慮して20項目を選び、「父親役割認識」および「母親役割認識」を測る尺度とした。各質問設問に対し、「とても重要度が高い・重要度が高い・どちらともいえない・重要度が低い・とても重要度が低い」の5段階評定で回答してもらった（表1参照）。

影響要因として、「親になることの受容性」「幼児への興味・関心」を設定し、やはり、伊藤の先行研究（2006）で用いられている質問項目を使った。さらに、親役割に関しては、父性対母性をめぐる議論に、伝統的性別役割分業観が影響していることが論じられてきたことから、「男女平等志向性」も影響要因とした。この「男女平等

表1 調査対象の内訳

別・共学および中・高別		内 訳	
男子校 (718)	中 学 (193)	国立 A 校	118
		私立 B 校	75
	高 校 (525)	国立 A 校	154
		私立 B 校	109
		公立 C 校	150
		公立 D 校	112
共 学 校 (265)	中 学 (126)	国立 E 校	64
		国立 G 校	62
	高 校 (139)	国立 F 校	18
		公立 H 校	68
		公立 I 校	53

志向性」を調べる質問項目は、鈴木（1991）の開発した平等主義的性役割態度（SESRA）尺度の中から、中学生にもわかりやすい内容の項目を選んで作成した。なお、各質問項目に対し、「全く違う・違う・どちらともいえない・その通り・全くその通り」の5段階評定の回答方式をとった（表8参照）。

3 結 果

3-1 親役割認識

父親役割認識について、各役割に対し、重要度が高い順に5・4・3・2・1点を与え、各質問項目の平均的を算出した結果を表2に示す。また、共学校の平均点と比較した結果も示した（*t*検定）。

表2より、「一家の生活費を稼ぐこと」や「母親（妻）と仲良くすること」「家族と一緒に時間をもつこと」などの項目の平均点が高く、「ミルクを飲ませたり、おしめを換えたり、子どもの世話をすること」「料理をしたり、洗濯をしたり、家事をすること」の項目の平均点が低かった。共学校男子中・高校生にも同様な傾向が見られたため、中・高校男子生徒の共通な認識であると考え。ただし、共学校男子中・高校生に比較すると有意に低い項目も多く、父親の多様な役割についての認識は低いことが示唆された。

母親役割認識についても、同様の手続きをおこない、各質問項目の平均的を算出し、共学校の平均点と比較した結果も示した（*t*検定）。結果を表3に示す。

表3より、「家族と一緒に時間をもつこと」「父親（夫）と仲良くすること」や子どもの世話や家事労働に関わる項目など、4点を超える項目が多く、母親には、さまざまな役割を期待していると捉えられる。一方、「一家の生活費を稼ぐこと」が最も低い点であり、一家の稼ぎ手としての母親役割は、あまり重要視されていないことが示された。これらの傾向は、やはり、共学校中・高校男子にも共通していた。また、父親の役割ほどではないが、共学校男子中・高校生に比較すると有意に低い項目も少なくないため、母親についても、役割認識は低いことが

表2 父親役割認識の平均点

質 問 項 目	平均値	標準偏差	共学校との比較*
① 一家の生活費を稼ぐこと	4.46	0.77	
② 一家の方向性を判断もしくは決定すること	3.88	0.92	<共
③ 一家の問題を解決すること	3.92	0.87	<共
④ 家族の話をよく聞き、公平に対処すること	3.87	0.94	<共
⑤ ミルクを飲ませたり、おしめを換えたり、子どもの世話をすること	3.20	0.98	<共
⑥ 料理をしたり、洗濯をしたり、家事をすること	3.24	0.95	<共
⑦ 子どものしつけをすること	3.97	0.87	<共
⑧ 子どもと一緒に遊ぶこと	4.10	0.81	<共
⑨ 子どもの相談相手になること	3.95	0.91	<共
⑩ 子どもに地域や日本の文化や習慣を教えること	3.58	1.04	
⑪ 社会や政治など世の中の出来事を子どもに教えること	3.88	0.92	
⑫ 男性としてのモデルを示すこと	3.58	1.06	<共
⑬ 自分の仕事を一生懸命すること	4.22	0.85	<共
⑭ 自分自身が楽しむこと	3.94	0.95	
⑮ 自分の趣味を持ち、有意義な時間を過ごすこと	3.96	0.90	
⑯ 家族と食事を一緒にすること	4.10	0.90	<共
⑰ 家族と一緒に時間を持つこと	4.24	0.82	<共
⑱ 母親（妻）と仲良くすること	4.37	0.81	<共
⑲ 社会人のモデルとなること	3.81	1.01	<共
⑳ 母親（妻）の精神的な支えになること	4.21	0.88	<共

* $p < 0.05$ で有意差があった場合のみ「<」「>」で示した

表3 母親役割認識の平均点

質 問 項 目	平均値	標準偏差	共学校との比較*
① 一家の生活費を稼ぐこと	2.64	0.94	
② 一家の方向性を判断もしくは決定すること	3.42	0.95	
③ 一家の問題を解決すること	3.72	0.87	
④ 家族の話をよく聞き、公平に対処すること	3.89	0.88	
⑤ ミルクを飲ませたり、おしめを換えたり、子どもの世話をすること	4.21	0.80	<共
⑥ 料理をしたり、洗濯をしたり、家事をすること	4.21	0.80	<共
⑦ 子どものしつけをすること	4.21	0.81	<共
⑧ 子どもと一緒に遊ぶこと	4.03	0.88	
⑨ 子どもの相談相手になること	4.09	0.87	<共
⑩ 子どもに地域や日本の文化や習慣を教えること	3.53	0.99	<共
⑪ 社会や政治など世の中の出来事を子どもに教えること	3.56	0.94	
⑫ 女性としてのモデルを示すこと	3.33	1.20	<共
⑬ 自分の仕事を一生懸命すること	3.76	1.00	<共
⑭ 自分自身が楽しむこと	4.05	0.89	
⑮ 自分の趣味を持ち、有意義な時間を過ごすこと	4.05	0.86	
⑯ 家族と食事を一緒にすること	4.30	0.82	<共
⑰ 家族と一緒に時間を持つこと	4.33	0.83	<共
⑱ 父親（夫）と仲良くすること	4.32	0.83	<共
⑲ 社会人のモデルとなること	3.66	1.03	<共
⑳ 父親（夫）の精神的な支えになること	4.18	0.90	<共

* $p < 0.05$ で有意差があった場合のみ「<」「>」で示した

伺われた。

次に、男子中・高校生の父親役割認識に関する各20項目の総得点を算出し、得点分布の上位・下位25%を抽出し、GP分析をおこなったところ、すべての項目で有意差が見出され、弁別力のある項目であることがわかった

ので、因子分析（重みなし最小二乗法・バリマックス回転）を行い、初期の固有値1以上で、5因子解を採用した。どの因子においても、因子負荷量0.35に満たない1項目は除き、再度、因子分析を実施した結果を表4に示した。

表4 父親役割認識因子分析結果（男子校）

父 親 役 割	回転後の因子行列				
	因 子				
	1	2	3	4	5
家族と一緒に時間を持つ	0.77				
母親（妻）と仲良くする	0.73				
家族と食事を一緒にする	0.64				
母親（妻）の精神的な支えになる	0.60				
子どもと一緒に遊ぶ	0.48				
自分の仕事を一生懸命する	0.40				
一家の生活費を稼ぐ	0.37				
子どもに地域や日本の文化や習慣を教える		0.68			
社会や政治など世の中の出来事を子どもに教える		0.68			
社会人のモデルとなる		0.52			
男性としてのモデルを示す		0.50			
一家の問題を解決する			0.76		
一家の方向性を判断もしくは決定する			0.72		
家族の話をよく聞き、公平に対処する			0.57		
料理をしたり、洗濯をしたり、家事をする				0.78	
ミルクを飲ませたり、おしめを換えたり、子どもの世話をする				0.77	
子どものしつけをする				0.46	
自分自身が楽しむ					0.85
自分の趣味を持ち、有意義な時間を過ごす					0.76
寄与率（%）	16.06	11.26	10.55	10.16	8.25

各因子において、因子負荷量の高かった項目内容から、第1因子は「家族と一緒に過ごし、仕事して稼ぐ役割」、第2因子は「子どもを教え導き、ロールモデルになる役割」、第3因子は「一家をリードする役割」、第4因子は「家事・子どもの世話をする役割」、第5因子は「生活を楽しむこと」とした。

同様に、男子校中・高校生の母親役割認識に関する各20項目にもGP分析をおこない、すべて弁別力のある項目であることがわかったので、因子分析（重みなし最小二乗法・バリマックス回転）を行った。初期の固有値1以上で、4因子解を採用し、どの因子においても、因子負荷量0.35に満たない4項目は除き、再度、因子分析を実施した。結果を表5に示す。

各因子において、因子負荷量の高かった項目内容から、第1因子は「家事をし、子どもと過ごす役割」第2因子は「一家をリードする役割」、第3因子は「生活を楽しむ、仕事をする役割」、第4因子は「子どもを教え導き、ロールモデルになる役割」とした。

これらの結果を共学校と比較するため、共学校男子中・高校生の父親・母親役割認識について、同様の手続きで、因子分析をおこなった結果、父親役割認識に関しては6因子が、母親役割認識に関しては5因子が抽出された（表6・7参照）。

父親役割認識については、表6より、各因子において、因子負荷量の高かった項目内容から、第1因子は「家族と一緒に過ごし、仕事をする役割」、第2因子は「一家をリードし、稼ぐ役割」、第3因子は「家事・子どもの世話をする役割」、第4因子は「子どもを教え導く役割」、第5因子は「妻の支えになり、モデルになる役割」、第

6因子は「生活を楽しむこと」と捉えられた。

母親役割認識については、表7より、第1因子は「家族・夫婦関係を良好に保つ役割」、第2因子は「子どもを教え導き、ロールモデルになる役割」、「一家をリードする役割」、第3因子は「家事・子どもの世話をする役割」、第4因子は「生活を楽しむ、仕事をする役割」、第5因子は「一家をリードする役割」と読み取ることができる。

以上のことから、男子校中・高校生は、父親役割について、仕事をして稼ぐこと・一家をリードするだけでなく、家族と過ごし、家事・子どもの世話をする役割、加えて父親が生活を楽しむことまで、多様な役割を認識していることが示された。母親役割についても、複合的に捉えていると考えるが、父親の役割認識に比較すると、漠然とした認識と言えるだろう。また、父親に関しては、仕事は一家の生活費を稼ぐこととして認識されているのに対し、母親にとっては、仕事は生活を楽しむことの一环として捉えられていることは、父親役割認識と母親役割認識の差異を象徴する結果の一つだと考える。つまり、女性（母親）が働くことは、一家のための収入を得るためのものではなく、より生活の質を高めるためのものというイメージをもっているということになる。

この点について、共学校の男子中・高校生も、母親に関しては、同じような結果であったが、父親については、少し異なった認識をしていると捉えられた。一家をリードする役割のなかに生活費を稼ぐ項目が入っていること、その他の違いとして、母親（妻）の支えになることと社会人としてのモデルになることが、一つの父親役割であると認識していることである。つまり、共学校の男子

表5 母親役割認識因子分析結果（男子校）

母 親 役 割	回転後の因子行列			
	因 子			
	1	2	3	4
ミルクを飲ませたり,おしめを換えたり,子どもの世話をする	0.87			
料理をしたり,洗濯をしたり,家事をする	0.86			
子どもの相談相手になる	0.57			
子どもと一緒に遊ぶ	0.47			
一家の問題を解決する		0.77		
一家の方向性を判断もしくは決定する		0.74		
家族の話をよく聞き,公平に対処する		0.65		
一家の生活費を稼ぐ		0.45		
自分自身が楽しむ			0.85	
自分の趣味を持ち,有意義な時間を過ごす			0.74	
自分の仕事を一生懸命する			0.49	
父親(夫)の精神的な支えになる			0.42	
子どもに地域や日本の文化習慣を教える				0.76
社会や政治など世の中の出来事を教える				0.70
社会人のモデルとなる				0.51
女性としてのモデルを示す				0.41
寄与率 (%)	16.69	13.68	13.46	13.25

表6 父親役割認識因子分析結果（共学校男子）

父 親 役 割	回転後の因子行列					
	因 子					
	1	2	3	4	5	6
家族と一緒に時間を持つ	0.80					
家族と食事を一緒にする	0.70					
子どもと一緒に遊ぶ	0.62					
母親(妻)と仲良くする	0.57					
自分の仕事を一生懸命する	0.53					
一家の方向性を判断もしくは決定する		0.75				
一家の問題を解決する		0.73				
家族の話をよく聞き,公平に対処する		0.60				
男性としてのモデルを示す		0.37				
一家の生活費を稼ぐ		0.35				
ミルクを飲ませたり,おしめを換えたり,子どもの世話をする			0.88			
料理をしたり,洗濯をしたり,家事をする			0.67			
子どものしつけをする			0.40			
社会や政治など世の中の出来事を子どもに教える				0.82		
子どもに地域や日本の文化や習慣を教える				0.66		
子どもの相談相手になる				0.38		
母親(妻)の精神的な支えになる					0.77	
社会人のモデルとなる					0.54	
自分の趣味を持ち,有意義な時間を過ごす						0.82
自分自身が楽しむ						0.74
寄与率 (%)	13.97	10.81	9.31	8.82	7.91	7.09

表7 母親役割認識因子分析結果（共学校男子）

母 親 役 割	回転後の因子行列				
	因 子				
	1	2	3	4	5
家族と一緒に時間を持つ	0.85				
家族と食事を一緒にする	0.75				
父親（夫）と仲良くする	0.71				
子どもの相談相手になる	0.62				
子どもと一緒に遊ぶ	0.55				
子どものしつけをする	0.53				
父親（夫）の精神的な支えになる	0.52				
社会や政治など世の中の出来事を子どもに教える		0.75			
子どもに地域や日本の文化や習慣を教える		0.71			
女性としてのモデルを示す		0.49			
社会人のモデルとなる		0.48			
料理をしたり、洗濯をしたり、家事をする			0.85		
ミルクを飲ませたり、おしめを換えたり、子どもの世話をする			0.84		
自分自身が楽しむ				0.94	
自分の趣味を持ち、有意義な時間を過ごす				0.64	
自分の仕事を一生懸命する				0.43	
一家の問題を解決する					0.78
一家の方向性を判断もしくは決定する					0.66
家族の話をよく聞き、公平に対処する					0.66
寄与率（％）	18.87	10.91	9.64	8.97	8.78

中・高校生のほうが、社会の一員としての父親、夫としての父親などの役割をより明確に認識できていると言える。

3-2 影響要因

影響要因として設定した「親になることの受容性」「幼児への興味・関心」「男女平等志向性」の男子校中・高校生の平均点を表8に示した。なお、比較考察のため、共学校男子中・高校生の結果も付記してあり、*t*検定の結果、「親になることの受容性」「幼児への興味・関心」については、男子校中・高校生は共学校男子中・高校生よりも、有意に低いことがわかった。

次に、本研究の目的が、男子校中・高校生の親役割認識に設定された影響要因がどのような影響を与えているのか探ることであるため、男子校中・高校生の父親役割認識の因子分析から得られた5因子それぞれにおいて、因子負荷量の高い項目の平均点を各下位尺度とした上で、「家族と一緒に過ごし、仕事して稼ぐ役割」「子どもを教え導き、ロールモデルになる役割」「一家をリードする役割」「家事・子どもの世話をする役割」の平均点を従属変数とし、「親になることの受容性」「幼児への興味・関心」「男女平等志向性」のそれぞれの平均点を独立変数として重回帰分析を実施した。結果を表9に示した。

表9より、親になることの受容性は5因子すべてに有意な影響が見出され、幼児への興味・関心は、家事・子どもの世話をする役割に、男女平等志向性は、家族と一緒に過ごし、仕事して稼ぐ役割と、家事・子どもの世話をする役割に有意に関連していることが示された。

これらのことは、まず、親になることの受容性を高めることが、多様な父親役割の認識を育むことを示唆している。また、幼児への関心・興味を引き出し、男女平等志向性を身につけることによって、子どもの世話をしたり、家事労働をする父親像の形成につながると言える。

4 考 察

以上の結果から、男子校中・高校生は、多様な父親役割を認識していることが示されたが、共学校男子中・高校生と比べると包括的・現実的認識は弱い傾向にあると考える。特に、子どもや家族にとっての父親像は明確であるのに、社会の一員としての父親、夫としての父親などの役割については、思い至らないことが示唆された。

一方、母親役割認識については、子どもや家族の世話をする役割を中心に捉えていること、仕事をすることで家族の生計を支えるとは、認識していないことがわかった。これは共学校の男子中・高校生も同様の結果であった。この結果から、男子校・共学校ともに、男子中・高校生にとって、「育てられている自分」としての母親像が強いことが伺われた。また、仕事の位置づけをみると、伝統的性別役割分業観の表れだと捉えることもできる。ただし、この点に関しては、対象となった中・高校生が、いわゆる進学校に通っていることから、経済的に恵まれた家庭環境にあると推測され、父親と母親が共に仕事をもつことによって生計を賄うという環境ではないことが理由の一つである可能性もあり、さらに検討が必要であると思われる。

関連要因として設定した「親になるための受容性」が、

表 8 関連要因の平均点

質 問 項 目	男子校	共学校
幼児への興味・関心	3.43 (1.02)	3.76 (1.01)
1 子どもに興味がある 2 子どもが好きだ	$p < 0.01$	
親になることを受容性	3.91 (0.88)	4.08 (0.86)
1 子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う	$p < 0.01$	
2 将来、親となって子どもを育てたい		
3 子どもを育てるのはやりがいのある仕事だと思う		
男女平等志向性	3.31 (0.52)	3.27 (0.49)
1 * 女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である	$n.s.$	
2 いつも家にいて、子育てに専念する母親が理想の母親であるとはかぎらない		
3 * 女性は家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい		
4 * 母親が仕事を持つと、ほかの家族が家事を分担しなくてはならないので、よくない		
5 * 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい		
6 女性も、仕事を通して自己実現や人間としての成長をめざすべきだ		
7 家事・育児は男女が協力してすべきである		
8 * 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである		
9 女性は子どもが生まれても仕事を続けたほうがよい		
10 * 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である		

注) () は標準偏差。回答は「全く違う・違う・どちらともいえない・その通り・全くその通り」の5段階評定。*は逆転項目。

表 9 父親役割認識の各因子の重回帰分析結果 (男子校)

独立変数	従属変数 (因子)			子どもを教え導き、ロールモデルになる役割			一家をリードする役割			家事・子育てをする役割			生活を楽しむこと		
	β	t 値	有意確率	β	t 値	有意確率	β	t 値	有意確率	β	t 値	有意確率	β	t 値	有意確率
親になることを受容性	0.50	11.2	***	0.359	7.44	***	0.34	7.0	***	0.199	4.36	***	0.144	2.86	**
幼児への興味・関心	-0.03	-0.6	n.s.	0.025	0.52	n.s.	-0.05	-1.0	n.s.	0.128	2.82	**	0.023	0.46	n.s.
男女平等志向性	0.12	3.6	***	0.000	0.00	n.s.	-0.01	-0.2	n.s.	0.307	9.15	***	0.030	0.80	n.s.
ΔR_2	0.256			0.138			0.092			0.203			0.024		
F 値	80.11***			38.61***			24.87***			61.68***			6.81***		

** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

共学校に比べると男子校中・高校生が有意に低い結果から、親になることを自分自身の問題として捉える認識のレベルが低いことが示唆される。この「親になるための受容性」は、父親役割認識を構成するすべての因子と有意に関連していることから、「親になるための受容性」の低さが、父親役割認識の包括的・現実的認識の弱さと連動している可能性が伺える。または、「父親となる自分」にとっての父親役割を認識できない部分が、将来、父親になることへの距離をもたらししているのかもしれない。

加えて、「幼児への興味・関心」も共学校と比べると有意に低く、この要因が「家事・子どもの世話をする」という父親役割と関連していることを考えると、情意面

や生活現実に関わる認識に課題があると思われる。

これらの課題に向き合うためには、中学の技術・家庭科、高校の家庭科の保育学習において、幼児への興味・関心を高め、親になることを自分自身の問題として考えていけるような教材・さまざまな体験・実習などを取り入れたカリキュラムの開発が求められる。

付記) 本研究は、2009・2010年度東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の研究プロジェクトの研究助成を受けて実施された調査の一部である。

引用文献

- 伊藤葉子. (2006). 中・高校生の親性準備性と発達と保育体験学習. 東京：風間書房.
- 文部省. (1989a). 中学校学習指導要領平成元年告示.
- 文部省. (1989b). 高等学校学習指導要領平成元年告示.
- 鈴木敦子. (1991). 平等主義的性役割態度：SESRA (英語版)の信頼性と妥当性の検討および日米女性の比較. 社会心理学研究, 6(2), 80-87.
- Yoko Ito. & Kinuyo Kurokawa. (2009). Japanese High School and University Students' Awareness of Father's Roles and Their Readiness for Parenting. Journal of Asian Regional Association for Home Economics 16(3), 98-105.